田舍源氏拾七

俤紫田舍源氏

第十七編上帙

柳亭彦作

國貞画

仙雀堂梓

へ13
3742
17

十七編上
婦まち咲
田舎原氏
十七編下
仙菴墨製
種彦作
国貞画

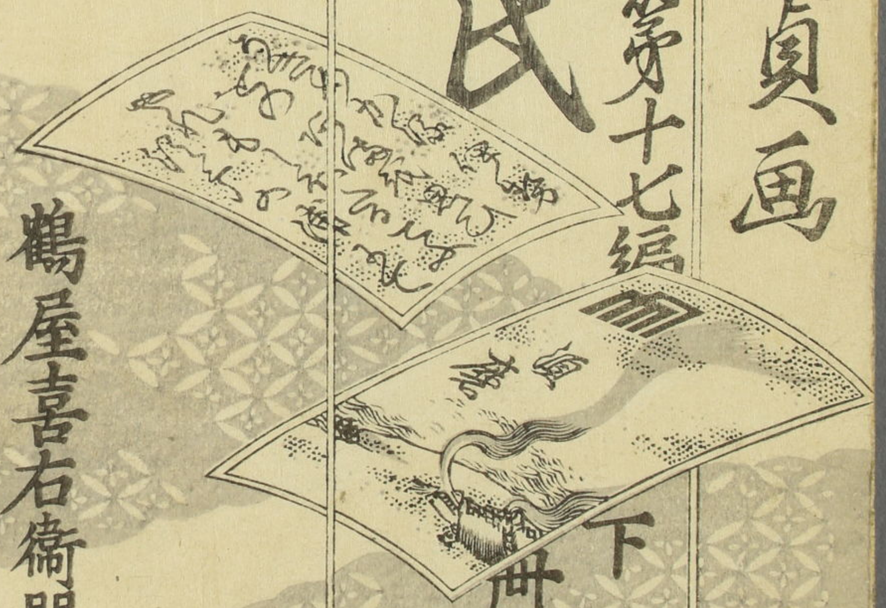
明へ13
號3742
巻17

種彦作　國貞画

田舍源氏

第十七編

下冊



天保六年乙未
孟陽發行書房
東都油町
鶴屋喜右衛門

俤紫田舍源氏第十七編

海嵐と烏賊ハ形異なれども物うら画ふ寫しうるハ風雅なる
章魚と河豚の画ハをりゝあるうちハ西施乳ハ西と悪き氣の
毒ありとて心ゆるべ丹魚ちゝろの類ハ佳肴
とすれども画くときハ美艶く鮟鱇鰻鯰の美味なるも形を画く
ときハ是その味ひハ画き紙を故なるうされバ須ゝ明石ハ
源氏最第一の巻なるゝ是を悉画圖ふ寫さゞ海苔の家ゝ獨淋し
美ふ持そとす久と都の女ハ彼所なるの久を見て歎くところの最なるさゝのゝ
あらぬ文章さへもその味ひを吹えよくハ写し紙く章魚と河豚のとゝ
川次郎と岩根の事をあの巻中へ交有ちゝろ丹美の表紙と
ゝかの爲ふする隈篠の二十葉を例の如く一折とるゝふるゝ

天保六年乙未正月四日

柳亭種彦記

光氏の年立源氏のごくるれば
須广の巻ハ廿六歳るれどの
さうしハ廿二歳の葵の巻を
廿一歳よりひきあげさるきの
巻ゆそ又一年書つゞめれば
今年廿四歳なり

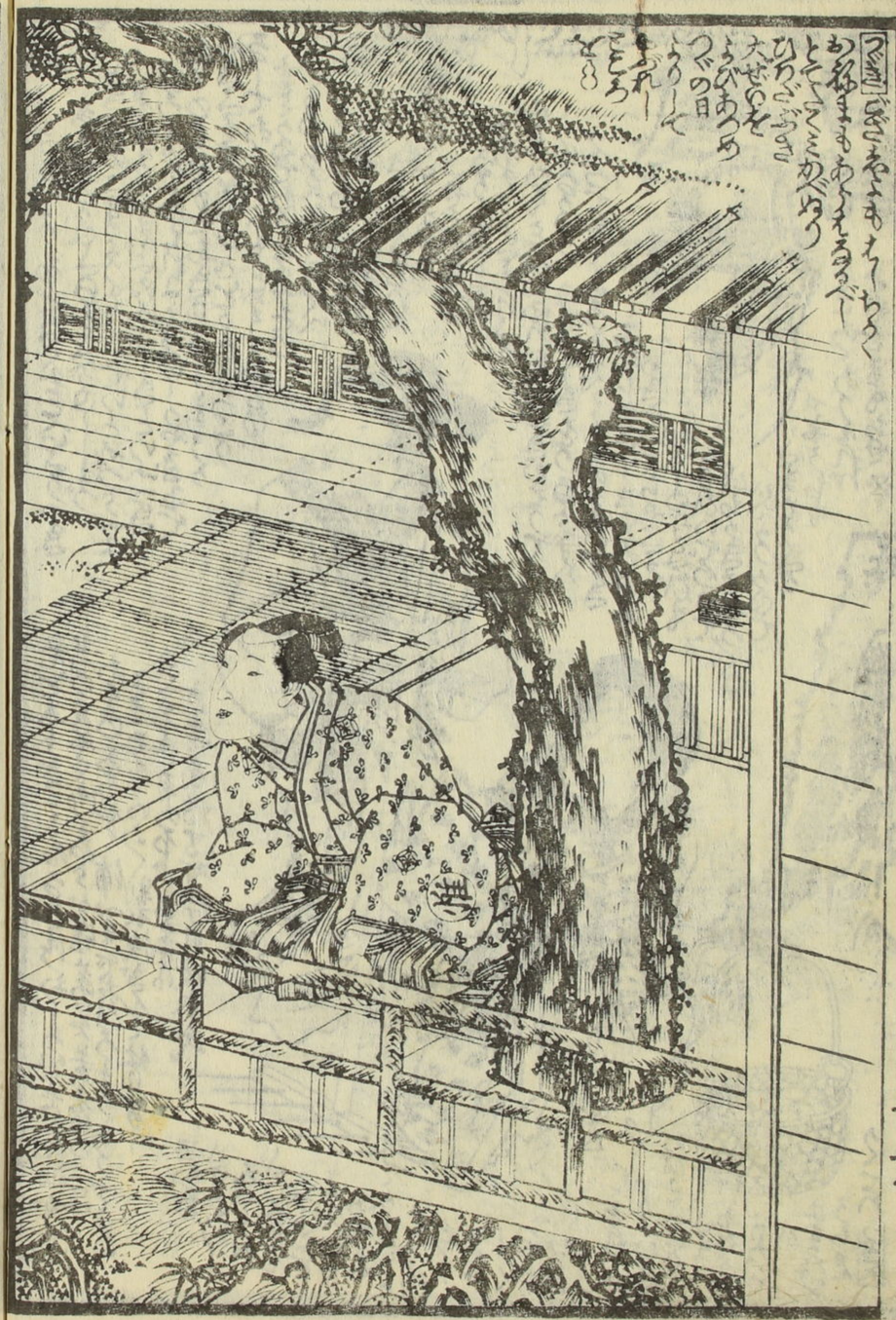
あくまでの
巻物の
べき圖を
ひさげて
ろうり文章れ
十六編・いと
まめく〜く
るぐさのろう・と
あるぬづけて
ひとりべ〜

良
萩

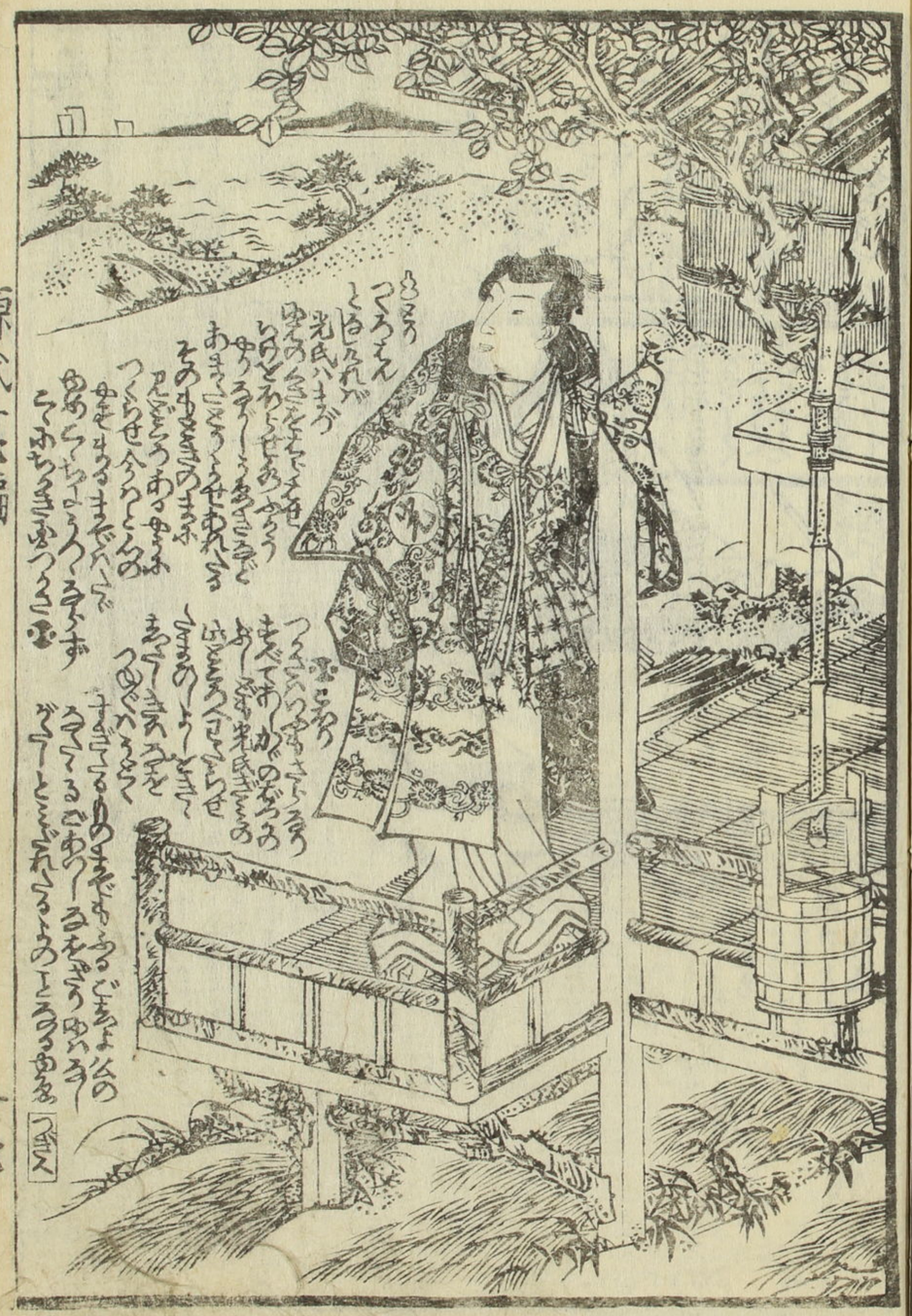
國貞画
種彦作

三の巻より
京橋南伝馬町三丁目 坂本氏
つぎへ

右へ
中へ
山中
四の巻へ



つぎ　ぎをまもりてちらく
ゐ移まもあくそをるべ
とくくこかぬ
ひぐぐぎ
大せのそ
うびあつ
つぐの日
うりしく
まれ
ことろ
ゑ



ふろう
つくろうそん
と呼ばれが
光氏ハまう
ゆえの色をたてそを
らひとわらせあかろう
ゆうろぐーうあさうど
あまうこそうくせれうる
そのもうきのまうふ
んぐどうろあるゆまふ
つくらせ今ろくくろの
ゆをそるまぐばくで
ゆあくちようくそうず
くゆちうきゆつくき

つくくくろ
まぐてゆ
よぐぶゆ
ふどろくゆ
くまのーう
まぐーきう
つぐかうろ
すぎくるゆ
くくくるぐ
ぐーとぐれくるうあとろるゆる

つぎへ

國貞画
種彦作
淨書千形道友

彫繁
田舍十七篇
原氏
種彦作 鶴彦
国貞画 彫

考訂大和詞初編

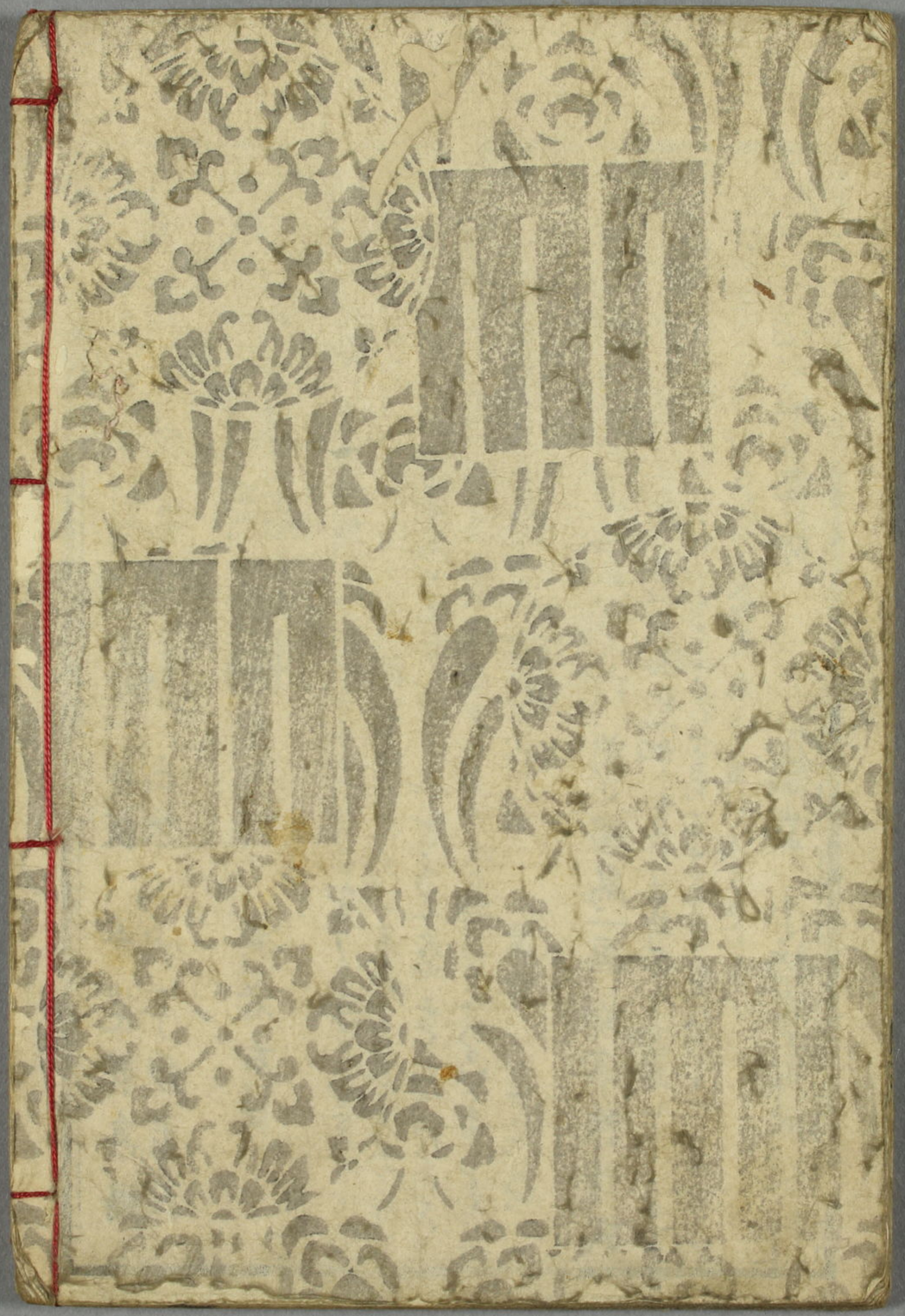
再板出来　弄花翁集編　柳亭種彦校

考訂大和詞二編

近刻　撰者右に同

初編の原本の刻とりたまぐれそこなかりしこともかきのせられば
あやまりいとあるべし二編のあれがてろはまうせようどころある詞と
ひのあり引歌のまき名をあらはしたるえびゆもきこえやもく俗語あり
注しかれば仮さうしゆいはてらまのさてらんの持にえれるとまちえて
もとめくさまたらんことを祈ぐ　撰者　弄花翁

江の島鎌倉大山往来雙六　前北齊爲一画　柳亭種彦撰

爲一翁の地名往来のさきたる新を写しもれしを柳亭の國歌をもとに
考へ別の名村名ゆゑ里数まで正されたるびのくえあくだれと
ひらきそ見めくべその地よ為ぐてちしそ奥あるべき双六なり

江戸通油町地本書林　仙鶴堂　小林喜右衛門印行